論考

幼児期の人間関係を育む教師の援助

上坂元絵里
（幼稚園教諭）

A児とB児の出会い

六月のある日、年中組に進級したA児がB児と一緒に職員室に入ってきた。A児は、昨年度は一人で黙々と遊ぶことが多かったが、担任にはよく話しかけ、セロハンテープで机と壁をつなげるように貼り付けるなど、思いがけない行動に驚かされることもあった。そんなA児が友達を伴って職員室に来たことに、A児の友達とのかかわりの変化を感じた。

幼小連携研究の成果を生かした工夫

本園では以前、「関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の開発」というテーマで、幼小が連携して研究に取り組んだことがある。お茶の水女子大学の附属校園は、大学と同じキャンパスにある幼稚園から高校まで、「主体性」や「自主協同」を教育目標に掲げている。一人ひとりの幼児や児童の、自ら考え、判断し、行動する力を育んでいくには、人とかかわる中での学びが重要だということに焦点を当てて、研究に取り組んだ。

一人ひとりの子どもは、幼稚園に入り、担任や友達と出会う。「この先生は、お母さんみたいに安心できる」「この子と一緒にいたい」「この子がやっていることは面白そう」など

上坂元絵里（かみさかもと えり）
お茶の水女子大学附属幼稚園副園長。

心が動いて、人とのかかわりが生まれる。幼児期に人とどうかかわり始めるかは、これからの人生に大きな影響を与える。子どもが自ら一歩を踏み出し人とかかわることが、何よりも尊重されなくてはならない。

幼小が連携して研究にあたる中で、「友達となかなか自分からかかわれない」「友達関係が固定して広がりにくい」といった課題を受けとめ、工夫してきたことがある。

幼小連携研究以前は、本園の学級編成は、二年保育、三年保育とも、クラス替えをせずに進級し、担任も持ち上がることを基本としていた。幼児期に人とかかわる力をより育みたいという課題を受け、年少組から年中組進級時にクラス替えを行うという大きな変更を行った。前述のA児とB児は、年少のときは隣のクラスで、一緒に遊ぶことはあまりなかった。それが、年中組に進級して同じクラスになり、お互いに「一緒に遊んでみたい」と魅力を感じ始め、職員室にも連れ立ってやって来たのだ。

子どもが自分で「一緒に遊びたい」と思う相手を見つけて友達になる、誰かとかかわるきっかけを能動的に見いだしていけるよう、教師は子どもたちを取り巻く環境に働きかける工夫を重ねていく必要がある。クラス替えをするにあたっても、子どもたちの関係が広がり深まることを願って、さまざまな観点から熟慮を重ねて編成を行っている。進級時のクラス替えのような大きな変更を行った場合に、どんな人間関係の変化が生まれるのかを敏感に感じ取る教師のまなざしこそがさらに大切になる。「今まであまり遊んだことのなかったB児を誘って、保育室から職員室までやって来たA児のうれしそうな笑顔」。こうした新しい変化の兆しを見逃さず、教職員間で伝えあい、共有したい。

C児とD児、かかわりの始まり

数年前、年中組に入園したばかりのC児と「恐竜のお面」作りをしたときのことが、印象深く思い出される。C児は入園直後から力強いタッチで絵を描いて、しっかりと塗り込んでいた。イメージを表現して遊ぶことを好み、ある日、「お面を作りたい」と教師に伝えてきた。教師はC児の思いを受け、実現を支えたいと必死でかかわり始めた。

他の子どもが、紙に描いた顔を切り取ってお面にして着けているのを見たC児の希望は、もっと立体的な恐竜のお面を作りたいというものだった。四歳児のこの時期に『あまり難しい手のかかるものは作れない』と教師は心の中で葛藤しつつ、今、可能な作り方を考えようと、C児とやりとりしていた。D児がその様子をじっと見つめ、C児のお面が完成すると、「僕も〇〇のお面作りたい」と遠慮がちに伝えてきた。昨年入園したD児は、体を動かして遊ぶことが大好きだったが、C児とのこの出会いにより、「作って遊ぶことも楽しい」と感じ、C児に対してほのかな憧れを含む親近感を抱いたようだ。

四歳児の一学期、たいへんな慌ただしい時間の流れの中ではあったが、この一連のやりとりを通して、C児は新しく出会った担任への信頼感を抱き始め、幼稚園で何かを作ることは楽しいと気づき、それを見て心を動かされたD児は、新しいC児との友達関係がここから始まり、体を動かす遊びに加え、表現して作ることも楽しいという感覚を味わったに違いないと思う。

このC児とD児の事例では、子ども同士の人間関係と、表現という「もの」とのかかわりが密接に連動していた。教師が援助しようと試みる際に、『人とのかかわり』だけに注目するより、『ものとのかかわり』と絡めて指導

するほうが効果的な場合がある。言い換えれば、人間関係を育むためには、その人自身＝自己、他者＝人、あるいはモノとのかかわりという、さまざまな関係性を見取りながら指導や援助をしていくことが大切である。

C児はイメージ豊かで、表現することに夢中になる力があったが、そこに興味を持って、「僕もやってみたい」とかかわってくれるD児たちが現れたことで、C児の人とのかかわりが豊かになった。一方のD児は、C児が表現を楽しむ姿に刺激を受けて、新たに夢中になって楽しむ『ものとのかかわり』を体験した。

子どもたちのかかわりを支えるために

その後、前述のB児が「A児は来ていない？」と探しに来ることがあった。A児に誘われてうれしかったけれど、いつも誘ってくれるわけではない。「今は一人がいい」と態度で伝えられてがっかりする等、葛藤を感じている様子があった。気の合う友達が見つかっても、常に双方が楽しく過ごせるわけではなく、教師は常にアンテナを張り巡らして、子どもたちの関係の変化を捉え、見守ったり、時には積極的にかかわったりしていく。

一人ひとりの子どもが新たに気の合う友達と出会ったり、かかわりが深まったりしているうれしさに教師は共感し、逆に、友達が見つからない、今までは楽しく遊べたのにうまくいかなくなった悲しさや辛さにも共感し、そっと支える。誰といつ遊ぶか、決めて行動するのは子ども自身。そのきっかけや後押しを精いっぱい、さりげなく援助していくのが、幼児期の人間関係を育む指導の要点ではないだろうか。